

〔論説〕

# 現代性の古典学（1）

——村上龍『限りなく透明に近いブルー』——

與那覇 潤

## 一、龍と春樹

一九七六年、あまりそうした呼び方はしないが戦後三十一年にあたる年の夏、日本の文学は史上稀な暴風雨に見舞われた。

同年の五月に出た『群像』六月号に、新人文文学賞の受賞作が載った。「武蔵野美術大学四年在学中」の「本名村上龍之助」こと村上龍が投稿した、『限りなく透明に近いブルー』（以下、『近いブルー』と略記）。七月には芥川賞の候補ともなるが、委員の証言によれば選考会はこうした調子だったらしい。

今度の銓衡<sup>せんこう</sup>は、村上龍氏の「限りなく透明に近いブルー」が一番問題だろうと思われたので、これに関する批評も、作品そのものも、一切読まず、候補作がとどけられても、一番あとから読みました（中村光夫）

これを迎えるジャーナリズムの過熱状態が果してこの新人の成長にプラスするか否か、……次作を待つて賞

をおくつても決して遅くはないと思った（永井龍男）

候補に上る以前から、それこそ「はしやぎ過ぎ」の感があるほど話題になった作品であるが、内容に較べて二百枚という長さは退屈である<sup>(1)</sup>（安岡章太郎）

練達の文学者たちが身構えるほどの熱狂を、わずか二か月の間に『近いブルー』は巻き起こしていた。他の候補は「冬空」「棄小舟」「出刃」「蔓の実」「いづくの蟹」「結婚」の六作だから、タイトルからして殴り込みのように異質である。

激論のはてに受賞となった際の、村上自身のコメントにいわく、「友人から電話があり、「どんな気分だ」と訊かれて、「未だに、何が何だかわけがわからん」と言う」と、「そのセリフは聞き飽きたぜ」とバカにされてしまいました<sup>(2)</sup>。単行本と文庫をあわせて三六〇万部を超す発行部数は、いまま芥川賞作品としての記録だという。

三年後の七九年、同じく群像新人文芸賞を受賞して村上春樹がデビューする（『風の歌を聴け』。芥川賞は落選）。後年、加藤典洋は春樹を論じる書籍の中ですら、発表時の同作はあくまで「小ぶりの台風」に留まり、龍の『近いブルー』の方が「数十年に一度という超弩級の台風」だったと記す<sup>(3)</sup>。村上龍の登場は、それほどの事件であった。

## 二、筆名と現実

眼前に沸きおこる『近いブルー』旋風を貶したのは、例によって江藤淳だった。まず『群像』誌上で読んだ段